PP-81 Permanent Interstitial Brachytherapy For Prostate Cancer In Hawaii

Deptment of Urology, Showa University School of Medicine¹⁾, Department of Radiation Therapy, The Queen's Medical Center, Honolulu, Hawaii, United States²⁾

Masashi Morita¹⁾, Lederer John. L.²⁾, Takashi Fukagai¹⁾
Hideki Yoshida¹⁾

This is a report of procedure and outcomes for men with prostate cancer (include 110 Japanese patients) who underwent permanent prostate brachytherapy in Honolulu. 327 patients underwent brachytherapy using either 103Pd or 125I, for clinical T1c-T3a Nx M0 prostate cancer, from December 1998 to June 2002. 84 patients were implanted as monotherapy; 51 patients received moderate-dose EBRT, followed by a prostate brachytherapy boost; 183 patients received neoadjuvant hormonal manipulation, in conjunction with brachytherapy as primary (44pts.) or in conjunction with moderate-dose EBRT and a prostate brachytherapy boost (139pts.). The median patient age was 68.8 years (range, 44–87 yrs). The median follow-up length was 680 days. The overall biochemical no evidence of disease survival rate achieved at 3 years was 92%. Observed 10-year follow up in the recent study document better biochemical disease free survival than several reported conventional EBRT series, and appears comparable to disease free from several surgical series. Additional follow-up patient cohort will be mandatory to confirm the durability of these results.

PP-82 Stage B, C 前立腺癌に対する高線量率組織内照射 (HDR-Brachytherapy)

川崎医科大学 泌尿器科¹⁾ 松田病院²⁾ 笠岡第一病院³⁾
常 義政¹⁾, 小林 達也¹⁾, 絹川 敬吾²⁾, 古川 洋二³⁾
森岡 政明¹⁾

【目的】 Stage B, C 前立腺癌に対して高線量率組織内照射 (HDR-brachytherapy) を行った。今回、当施設での近接効果を中心に本療法の可能性について検討した。【対象と方法】 対象は 1997 年 10 月から 2002 年 4 月までの 89 例。年齢は 50–81 歳 (中央値 71 歳), 観察期間は 6–60 カ月 (中央値 32 カ月)。Stage B が 66 例, Stage C が 23 例であった。初診時 PSA は 1.1–248ng/ml (中央値 11.9ng/ml) であった。放射線治療後のアジュバントホルモン療法は行っていない。治療内容は、前立腺部に外照射 (4 門照射) として 2.3Gy×16 回 (36.8 Gy) に加え HDR brachytherapy : 6.0Gy×4 回/30 時間 (22Gy) としている。【結果】現時点の PSA 値は 0.0–3.9ng/ml (中央値 0.4ng/ml)。再燃と判断したのは 7 例であり、骨病巣が出現した Clinical failure が 2 例, PSA failure が 5 例であった。経過良好な 82 例のうち 62 例 (75.6%) は PSA 値が 1.0ng/ml 未満であった。初診時 PSA, Gleason sum, Stage B, C 間に治療効果の差は認めなかった。3 年 PSA 非再発率は 94% であった。重篤な副作用はなく、いずれも対症療法でコントロール可能であった。【結論】 近接効果ではあるが満足のいく結果であった。特に Stage C には有効な治療手段と考えられた。重篤な副作用はなく、機能温存が期待でき安全に行うことができた。

PP-83 前立腺癌に対する永久刺入線源 Au-198 を用いた Brachytherapy の初期経験

東京慈恵会医科大学 泌尿器科¹⁾ 東京慈恵会医科大学 放射線科²⁾

三木 健太¹⁾, 佐々木 裕¹⁾, 池本 庸¹⁾, 大石 幸彦¹⁾, 青木 学²⁾
【はじめに】 前立腺癌に対する永久刺入線源を用いた Brachytherapy は、多くの報告があるが、我が国では I-125 を輸入することができないため、一部の施設で、他の核種を用い、同じような治療をはじめているのが現状である。【目的】 今回我々は永久刺入線源として、Au-198 を用い、欧米で行われている Brachytherapy とほぼ同じ方法で治療を行ったので、初期経験を報告する。【対象と方法】 2001 年 12 月から 2002 年 7 月までに慈恵医大で Brachytherapy を行った 4 例を対象とした。年齢は 60–69 才 (平均 65 才)、初診時の PSA は 18–49ng/ml (平均 35.8ng/ml) で、組織診断は、中～低分化型腺癌で Gleason score は 6 が 2 例、9 が 2 例であった。治療前に TRUS を行い、専用のソフトで治療計画を作成した。腰椎麻酔下で鎮静剤を併用し、TRUS ガイド下にテンプレートを用いて Au-198 の永久刺入線源を会陰より前立腺内に留置した。刺入後、CT で線源の分布を確認し、外照射を追加した。照射量はトータルで約 70Gy とした。【結果】 治療中の合併症はなかった。2 週後に排尿困難や排尿時痛などの副作用を認めたが、4 週間には消失していた。重篤な合併症は認められなかった。

PP-84 前立腺全摘除術後の salvage 放射線療法

国立病院 四国がんセンター 泌尿器科

東 浩司, 小泉 貴裕, 橋根 勝義, 住吉 義光

【目的】 前立腺全摘除術後の PSA failure に対する salvage 放射線療法について検討した。【対象および方法】 1992 年 4 月から 2001 年 12 月までに施行した前立腺全摘症例 185 例中 PSA 値が測定限界未満となり PSA failure を来した 15 例を対象とした。放射線療法は原則として対向 4 門で前立腺床に 60Gy 照射した。照射後 PSA が 0.1ng/ml 未満になったものを治療効果ありとし、照射後の PSA failure は 0.1ng/ml を越えて 3 回連続上昇とした。【結果】 放射線療法前の平均 PSA 値は 0.274ng/ml (0.140–1.057ng/ml)、術後放射線療法開始までの平均期間は 548 日 (128–1290 日)、平均照射量は 60Gy、照射後の平均観察期間は 829 日 (197–1363 日) であった。15 例中 12 例 (80%) に治療効果を認め、平均奏効期間は 559 + 日 (155–1023 + 日) であった。放射線療法後、4 例 (33.3%) に PSA failure を認め、この 4 例の平均奏効期間は 690 日 (335–1111 日) であった。放射線治療に効果のなかった 3 例および照射後の failure 4 例中 3 例は内分泌療法を追加した。有害事象は、RTOG/EORTC の判定基準で Grade 1 までであった。【結論】 今回の検討で前立腺全摘除術後の salvage 放射線療法は重篤な有害事象もなく高い治療効果を認めた。今後長期間の観察により survival benefit の検討が必要と考えられた。